

菊子の死生観

―「逝く者」より

水野 真理子

はじめに

止の三閨秀の一人とも称された、富山出身の女流作家（尾島）菊子（一八七九―一九五七）は、これまでに少女小説の作家として評価されてきた¹。実際に、〇三（明治三六）年、二十四歳で、秋香女子のペンムで小説を書き始めた彼女が、作家として名を成しく過程においては、当時少女らに人気の高かった少女誌に、数多くの少女小説を発表し、少女時代の家庭経験、父との関係、また嫁姑問題に翻弄された母のそれらを描きながら、その家庭環境の中で少女が煩成長していくという物語に秀作が見られた。

しかし、彼女には、少女小説作家の枠には収まりきらない筆力があり、少女小説作家以上の評価を与えるこ

とができると筆者は考えている。近年、最も網羅的に小寺について調査し、多数の研究論文を発表してきた金子幸代も、同様の評価をしている。金子は、小寺の執筆活動をおおよそ三期に分けて、その中期については、作品発表の場が少女雑誌のみならず、一般の文芸雑誌にも広がり、「少女小説作家を超える本格的な作家」として、飛躍した時期だと捉えている²。金子は、明確な年代分けをしていないが、作品や発表媒体、活動状況に基づいて、初期はおおよそ一九〇三年から一九〇八年まで、中期は一九〇九年から一九二六年頃まで、そして後期は一九二七年、徳田秋声の妻はまの一周忌を節目として知人の作家や門下生などが会する二日会に参加し、雑誌『あらくれ』の同人として活躍していく頃から晩年までとしている³。

少女小説家を越えて本格的作家を目指した小寺が、テーマの一つとして選んだのは、「死」の問題であった。というのは、この中期において、「死」を題材とした作品がかなり見受けられるからである。作家デビューから約一〇年が経過した一九一六年には、「死」について真正面から捉えた短編小説「逝く者」『文章世界』一九一六年十

一月)を執筆している。他には、子犬の死を扱った随筆「小さき生涯」(『太陽』一九二〇年二月)また、東京に住む従姉の家に寄寓していた際の精神的葛藤を扱った随筆「死の幻影」(『婦人画報』一九二〇年九月)、関東大震災の惨事を受けて人間の生死について思いをきたし、生き抜いていくことへの決意を述べた「新東京を前にして」(『週刊朝日』一九二三年十一月)、暗闇に覆われていた自身の少女時代を振り返る「死の魅惑に」(『婦人画報』一九二六年四月)を発表している。本小論では、これまですべてほとんど扱われることのなかった作品「逝く者」を中心的に取り上げ、その作品の特徴と、彼女が「死」の問題をどのように描いたかについて考察する。その際、同時代の文学的思潮を視野に入れながら、また「死」を扱った随筆から彼女の死生観と境遇を辿りながら、探ってみる。

二、「逝く者」―弟の死を見つめて

「逝く者」は、一九一六(大正五)年一月の『文章世界』に掲載された^三。これを発表した頃、彼女は三十七

歳、画家の小寺健吉と結婚して二年後のことであった。彼女はこの作品を「私の好きな私の作」(『中央文学』一九二一年二月)において、「頬紅」「愛の影」「朱ローソクの灯影」とともに挙げている^四。したがって、彼女自身にとっても、思い入れのある特別な作品だったと考えられよう。

「死は今彼の眼前に迫っていた。」との直裁的な一文で始まるこの物語のあらすじはこうである。結核を患い、病院で看護婦に手を取られ、最後の時を迎えようとしている弟を、姉である「私」が母とともに、いたたまれない思いで見守っている。「私」の夫も、職場から病院に急いで駆けつけた。しかし、彼女らの願いも空しく弟は息絶える。その後、彼の亡骸は看護婦たちの手によって清められ、霊安室に安置されたのち、医師たちによって死体解剖される。その後、ようやく火葬されることとなった、その一部始終を、私は悲しみに暮れながらも、時折、弟の死に対して、冷静な客観的な印象を与える眼差しで、追っていく。実生活において小寺は、弟を彼が二六歳の時に、結核で亡くしている。その経験を色濃く反映した作品と考えられよう。

この小説における特徴として、まず目を惹くのは、描写における写実性である。自然主義作家としてその地位を確立した徳田秋声に小寺は師事していたことから、文体上の影響を彼から、当然受けていると思われる。秋声から受けた影響について、ここで深入りすることはできないが、それを反映しているかのように、臨終間際の弟の様子は、まるですぐその場にいるかのような筆致で丁寧に描かれている。はじまりの緊迫した状況は次のように説明される。

一人の看護婦は彼の左の手を取つて、一心に時計を瞞めてゐる。一人の看護婦は彼の右手に蹲踞^{しゃが}んで彼の額^{あぶら}からと鼻の下からとヂリ／＼滲み出す脂肪——人間の生命が今終わらうとするときに、異常な抵抗力で絞り出すその汗と脂肪^{あぶら}を、ガーゼを持つて絶えず拭き取つてゐる。(六二頁)

二人の看護婦たちの息を呑むような臨終間際の看護が描写された後、さらに弟の苦しむ様子は次のように描かれる。

額に氷嚢をむすびつけて、右の胸にカラシを貼りつけて、氷の枕の上にのせた頭を、悩ましげに、

右に向け、左に向け、転々として喘ぎ悶えてゐる彼の顔色が、蒼白といふよりも、全く泥色——死灰——のやうであつた。荒い呼吸が彼の咽喉^{のど}から激しく押し出されてゐる。さうして、彼はただ異常に苦しんでゐる。(六三頁)

死に際の弟の姿に、美化するような表現はなく、苦しみが左右にのたうち悶える姿、「蒼白」というよりはむしろ「泥色」のような肌、「死灰」のようだというように、病に蝕まれる現実の苦渋と凄惨さが、強調されている。

こうした臨場感溢れる場面描写の合間に、彼女の死に対する認識が挟み込まれ、読者の内面に訴えかける。彼女はまず死を「不可思議な一大事件」(六三頁)ではあるが、しかし「人生の最も自然であるべき事件」(六三頁)と述べて、不思議でもありながら、それでもすべての人々が必ず迎えなければいけない結末として、自然の摂理であると冷静に受け止める。その上で、死に対して抑えがたい恐怖心、畏怖心を告白する。彼女のその心情は、次のような率直な心の叫びによく描写されている。

『死とは何であらうか、あゝ不思議な死！。不思議な生！。生まれるといふことの既に不思議でなければならぬに、死といふものゝ、またなんといふ不思議な事実なのであらう！』(六三頁)

臨終の弟を前にして、さらに彼女の自問は続く。

『あゝ、いやゝ、人間に死といふ悲しみがあるならば、もうゝ決して初めから生まれて来ない方が好い。人間が一度産声をあげたら、その瞬間、既に「死」の運命を担つてゐるのではないか。死はいやである。死はいやである。』(六四頁)

このように写實的な描写を積み上げながら、そこに「死」に対する率直な思いも重ねる。

描写に写実性が見られる一方、彼女は「死」を美しいものとして浪漫的に捉えてもいる。弟が息絶えた後、「私」は彼が情愛を持つて看護婦たちに看病された様子などを振り返る。「私」は、「再び蘇生する希望を持たない、血気の青年患者」(七五頁)であつた弟にとって、看護婦たちは、まるで「天使のような感銘を持つて迎へられたであらう！」(七五頁)と思ひを馳せ、それは、「両性の間に触れ合ふ、あたゝかい情合の親しみから、自然に離れが

たい懐かしみが、お互の胸に融け合つてゐるからに違ひない」(七五頁)と考える。弟が結核と闘つてきたその月日は、患者と看護婦たちにしか築くことができない美しい関係性として、懐かしみをもって想起されている。

さらに小寺は、「死」に対する直接的な美意識を「私」に語らせる。「私」は、毎日労り慰められながら亡くなつた弟は、「自分たちが今彼の若い死を悼み悲しむほどに、彼は決して、彼自身の死を、死の瞬間に於いても感じてはゐない」(七三頁)と思う。なぜならば、「死は生を意識してゐる間に於いてのみ恐怖を感じさせる」(七四頁)のであり、「死そのものは、死の瞬間は極めて安樂なものに違ひない」(七四頁)からである。だからこそ、死は美しいと思うと述べる。

弟の死に対して、浪漫的な感情も抱く一方、再び、「私」の視点は、その死の現実と悲哀から距離を取り、次には医学に対する疑念、批判へと発展する。例えば、弟の遺体の解剖を待つ「私」は、冷たい扉の奥で行われるその解剖という処置について、『死』といふものを飽くまでも學術的に研究する医員たちの残酷な手」(八四頁)によつて行われると表現している。先述の看護婦と患者との

関係性とは対照的に、医者たちへの感謝の念もないわけではないが、その一方怒りや疑念を次のように吐露している。

彼女は又更に他の一方では三年間一時一刻も怠らずに、医師の命を背かないで守つたあらゆる彼の養生が、何の役に立つたらうかと怪しまれた。三年間の苦い服薬、注射、日光浴、空氣療法、營養、精神の安静、そんなものゝ凡てを、彼女は今悉く疑はねばならない。さうして、呼吸器病に対する世界の医術の甚だしく遲鈍であることを嘆かねばならない。然かも彼女の苦しい精力から辛ふじて産み出されたその間の多額の経費が、残らずそれ等の無駄な一時的の気安め——医員たちの単なる試み——のために消耗されたことを思ふと、彼女は寧ろ腹立たしかつた。(八五—八六頁)

ここからは、結核に対して、庶民の間で行われる治療法というものに、取り立てて特効薬もなく、さらに世界の医療における結核の治療が、随分と遅れていたという当時の状況、またそれに対して齒がゆい思いでいる庶民の姿が明確にわかり、この時代においての死の病としての

結核の位置づけが確認されよう。

以上のような、写真と美化の描写、また近代的な医療に対しても抱く批判意識などの描写によって物語が進められる。「死」への畏怖と弟の「死」に対する悲しみや悔しさを描いてはいるが、しかし最後には、意外にも「死」に覆われた暗さで物語が終わるのではなく、死にゆく者と比較して、今を生きる人間の「生」を肯定し、それに讃歌を送って物語を締めくくっている。

火葬場へ送られた弟を見送り、彼の肢体を熱い炎が覆つていく様を「私」は想い浮かべながら、母と夫とともに雨の降る暗い道を街に向かつて歩いていく。そして電車に乗ったときに、「初めて人間の生きた世界に戻つて来た——といふ安心と、淡いよこびとを感じた」(一〇〇頁)という彼女は、「活々とした人だち」(一〇〇頁)が大勢電車に乗っている姿を眺める。電車の終点には、若者たちの心を誘う場末の遊廓があつた。そこへ集まる人々の群れに思いを馳せ、彼女は次のように述べる。

彼等の誰も「人間の死」の街路が、すぐ眼の下に細く長く永久に横はつてゐることに氣附かないであらう！否、或はそれに氣附かうとして、強ひ

て、生の歎びに酔ふやうに、或は笑ひ、或は語り、或は楽しげに、或は無心に、或は又侘しげに、打興じ、打戯れ、打鬱ぎなどして動きつゝあるのである。彼女は淋しい心でそれ等の人々を眺めながら、一人々々の仕合はせな生を祝福してやりたいと思つた。(二〇〇頁)

暗い結末が多いと評された彼女の少女小説であつたが、この作品に関しては、「死」を迎えなければいけない人間の宿命を描きつつも、「生」に対する希望を描き、光を感じさせる印象を残している。

三、「逝く者」の評価―結核を描く文学として

小寺が結核によつて亡くなつた弟の姿を描いたが、結核による「死」というテーマは、明治から大正にかけての文学作品の中で、多く扱われたものだった。実際に江戸末期から明治維新を経て、日本が近代化、産業化、都市化の道を歩んでいくにつれて、結核患者は増大し続け、昭和三〇年代に至るまで、一千万人以上の人々が結核で命を落とした^五。日本だけでなく西洋諸国においても、工

業化を成し遂げていく十八世紀後半から、結核が猛威を振るい、例えばロンドンにおいては、人口十万人に対して一千人という高い死亡率であつたという^六。また、結核の持つイメージとして、十分な病院施設、治療法などが確立されず、死を免れないという恐ろしい伝染病としての認識があつた。さらに、患者たちは世間から同情と差別の眼差しを向けられることも必至であつた。

しかし、このような苛酷な病氣であつたにも関わらず、他方では、ヨーロッパ、日本ともに、結核には独特な甘美なイメージが与えられたともいう。それは美しく若い女性が結核にかかつて早逝するという佳人薄命のイメージ、または才能のある前途有望な男性が結核を患つたことで、その天才ぶりを開花させ、命を落とすという、天才神話なるものが広まっていた。またロマンティックな情熱が結核を引き起こすという説まで、公に語られたという^七。

このような甘美なイメージを、結核に対して人々が抱くことに大きな役割を果たしたのが、文学作品であつた。福田眞人『結核の文化史』(一九九五)によれば、近代文学の中で結核(肺病)を扱った初期の作品には、古川魁

蓄『浅尾よし江の履歴』（一八八二〇明治十五〇年）、成島柳北『熱海文藪』（一八八三〇明治十六〇年）、末廣鐵腸『雪中梅』（一八八六〇明治十九〇年）があり、さらに物語の重要な背景要素として結核（肺病）を取り上げたものには、廣津柳浪『残菊』（一八八九〇明治二二〇年）があるという。その後、結核（肺病）のロマン化を決定的にしたものは、人気小説であった徳富蘆花の『不如帰』（一九〇〇明治三三〇年）であった^八。

明治三六年から執筆を始め、蘆花とも同時代に生きていた小寺は、当然、この結核のイメージを彼女の読書体験の中で得ていたと考えられる。彼女は東京の従姉の家^九に寄寓していた頃、朝から晩まで貸本屋から借りてきた諸作家たちの小説、尾崎紅葉、幸田露伴、樋口一葉、廣津柳浪、黒岩涙香、川上眉山、高山樗牛らの作品を耽読していた。『逝く者』は『不如帰』から十七年程経った後、大正五年に発表されたため、その間の医療の発達や社会状況の変化もあると思われるが、日本近代文学の枠組みの中から、小説家を目指した小寺の作品も、この結核の文学作品の流れを汲んでいると言えよう。

それでは、小寺の作品における結核の描かれ方、ロマ

ン化についてはどうか。先に述べた作品の特徴にあるように、この作品においては、淡々と写實的に事態を捉えようとする態度が主であるが、その中に、甘美な「死」のイメージが垣間見えていると言えよう。しかし、弟という人物の人となりや家庭環境について推測させる描写は非常に少なく、裕福でもないが、その一方、治療費の工面に苦労はしたものの、貧困の極みにあるという状態でもなかった。したがって、結核の定型イメージであった天才的、将来性がある青年の夭折という若者としては描かれておらず、むしろ市井の一人として描かれている。また彼の臨終の姿に至っても、「泥色―死灰―」の肌の色にも表れているように、美しい描写で描いてはいない。そして、最も重要なことは、結核によって引き起こされる「死」が、愛の成就となったり、才能の開花に結び付けられ、一つのクライマックスを提示するというのではなく、「死」はあくまでも恐るべきもの、人々が避けては通れない運命だとした上で、今を生きている人々のかけがえのない時間と「生」の輝かしさに眼差しを向けている。こうした点から、彼女の作品は、結核のロマン化の傾向があつた文学作品の流れを汲みつつも、

彼女の特徴の一つでもある写実性を生かしながら、「生」と「死」を見つめるという作品だったと評価できよう。

四、死への関心―「死の幻影」「死の魅惑」に

以上述べたような「逝く者」における作風については、彼女の目指した文体や秋声をはじめ彼女が好んだという永井荷風、有島武郎など様々な作家の影響があるだろう。それらの影響関係については稿を改めることとし、ここでは、「逝く者」にみられる作品の特徴を導いたと思われる要因を、彼女の死生観や作品を描くに至った状況に求めてみたい。

冒頭でも触れたが、小寺には自らの「死」に対する強い思いを描く随筆がいくつもあり、彼女が自殺を考えたことも幾度となく告白している。「死の幻影」においては、従姉の家に寄寓していた頃の彼女の境遇が詳細に述べられている^{二〇}。小寺は富山市八人町尋常小学校高等科を卒業後、父の事業が失敗したことで、数え年十七歳の時（一八九五〇明治二八〇年か）、東京に住む従姉の樽井ふさの家に下宿するという道を選んだ。ふさの夫樽井藤吉は、

ふさより一八歳年長、東洋社会党に属する活動家であった。ふさは小寺よりも一〇歳前後年上であったと推測される。そこで、従姉の世話になり感謝の気持ちを抱きながらも、その生活は、小寺の学資を使い込んでしまうほどの貧窮であった。さらに、家を留守にすることが多かった夫に対して、極度の寂しさを抱き、満たされない結婚生活に、後悔の思いにもかられ、精神不安に陥りがちなふさから、結婚適齢期の娘であった小寺は、嫉妬の対象ともなり、さらに彼女のヒステリーのはけ口ともされていた。文筆で身を立てることを望みながらも、女の幸せは結婚にあると迫る従姉の顔を窺いながら、小寺は暮らした。その状況下において小寺の精神状態も悪化していき、自身の将来への希望を見出すことができないと痛感した彼女は、自殺を考える。

音無川に沿った「御院殿下」は、「昔から世の落伍者や、厭世詩人が轢死を企てる所」（二二七頁）だと聞き、死ぬならこの場所と小寺は決めていたという。肌寒い冷気を感じる初秋の頃、小寺は「御院殿下」へと向かっていった。そこは崖になっていて、崖下には四本の線路があった。その場を恐怖心とともに眺めながらも、彼女は死に

対して、酔いしれるような感覚を抱いていたようだ。

自分は今可なり『死』を美化してそれに酔ひすぎであるやうにも思はれた。けれど、死なう、といふ心持はやつぱり美しい好い心持に違ひなかつた。もう雫が垂れるほどに露のおりた冷たい草叢の上に長々と足を伸ばしながら、私は長い間憧れてゐた夢の世界にやつと辿り着いたやうな、丸でお伽噺にでも出て来る少女のやうな心持ちになつて、今は怖いといふ觀念もなく、激しい蚊の群れを袂で拂ひながら、そこではばらく冥想に耽つてゐた。

(一二八頁)

こうした描写からは、彼女が死を幻想的に美化して捉えていただらうという様子がわかる。また、写實的な描写を小説に取り入れてきた彼女であつただけに、彼女自身が、その時代を振り返つて、「死」を美化していたことを再認識して、当時の心境をこのように書き綴つたとも考えられる。

もう少し、彼女の「死」に対してのイメージを見てみよう。

「死は此世の一切の苦しみ悩みを超越する。無明

の束縛から放たれる。そして、私の魂は初めて自由に絶対無限の永遠に生きるであらう。あゝやつぱり私は死ななければならないのだ。」(一二八―

一二九頁)

ここには、「逝く者」にも描かれていた「死」の認識が表れている。弟を病の苦しみから解放したのと同様に、「死」は彼女の精神を蝕む悩みから彼女を解き放つ超越的な力を持つものとして描かれている。

列車が通り身を投げるまさにそのタイミングを、彼女はやはり「死」を目前にして足がひるんで、見送つてしまった。しかし、自分自身はやはり死ぬためにここに来たと、ひたすら盲目的に「死」を希求する彼女は、ふと自分がどのように「死」を意識するようになったかを考えようと、「又その冷たい草の上に蹲踞んで、うつとりと眼を閉ぢながら夢現となく冥想」(一二九頁)した。想い起こせば彼女は自分が十二、三歳の頃から死を意識し始め、その理由は、陰鬱な家庭環境にもあつたが、生来の自分の悩みがちな暗い性格が原因であつたと述べる。そして、彼女はいつしか『死』の幻影に憧憬してゐた

(一二九頁) という。

これらに描かれるような彼女の「死」に対するイメージは、ともすれば青少年期に浮かびがちな危うい感情であって、誰にでも起こりうる可能性のある「死」のように思える。どちらかというと、この頃の「死」はまさにロマン化され、美化されていた「死」だったと言えよう。こうした「死」への幻想的なイメージを打ち破り、「死」から「生」の方へ、気持ちを向かわせたものは何だったのか。「死の魅惑に」では次のように記述している¹⁾。

なんと考へても此世に生きるに望みなく『死』は自分を一切の苦しみから救つてくれるものだと思つて、毎日／＼あの御院殿下へ飛び込んで死ぬことばかり空想してゐるのです。死んだあとで国にある母や弟妹がさぞ悲しむだらうと思つたり、やつぱり死んだ方が一番いゝと考へたり、淋しい歌を作つて見たり、哀れ深い日記をやたらにつけたり、そして毎夜／＼蒲団に顔を埋めて泣いてばかりゐたものでした。(後略)

あのくらゐに死にたかつた娘が、突如、『生きよう』と勇ましく決心したのは、その後間もなくのこと、たしかに文学に救はれたのでした。それ

と一つは、田舎にゐた次の弟が病死したので、私が母や幼い弟妹を背負つて立たなければならぬ、といふ大きな実際問題の暗礁に打突かつたためでした。(一九九頁)

彼女を死の道から救つたのは、文学とそして、まさに「逝く者」で再現されたと思われる弟の「死」とその後、自分が母や弟妹を養つていかなければいけないという實際的な生活上の責任であつた。ここから判断すると、彼女は、おぼろげに、美しいものとして描いていた「死」の幻影を、現実の弟の凄惨な「死」によつて打ち破られ、そこから、否が応でも、「生」へと向かわねばならず、生きる渴望を見出さなければならなかつた。「逝く者」の最後に送つた生きる者たちへの讃歌は、弟を失つた、自分への強い激励でもあつただろう。

五、おわりに

以上述べてきたように、本稿では少女小説家としてのみ評価されてきた傾向のある小寺の作品の中で、本格的な小説家を目指して執筆した、「死」を主題に据えた「逝

く者」に焦点を当て、まずはその作品の特徴、「死」の描き方、また結核文学の流れにおいての作品の評価をまとめた。そして、結核による「死」を常套手段としてロマン化することなく、写実的な描写に基づき、「生」の儚さと歎びを強調するという作品の特徴が、小寺自身が抱いていた死生観と関連づけられることを指摘した。

これまでの小寺の評価は、同時代の作家による評価としては女らしい素直さや甘さ、善良さなど性格論にすり替えられていたり、また決して多くはない先行研究においても、生活苦や少女時代の苦難ゆえの暗さばかりが強調されてきたようだ。そこに金子幸代は切り込んで、女性職業作家の先駆者の一人であるという評価をした^{二〇}。本小論で扱った「逝く者」を例に取っても、彼女の作品を再評価していく論点は、例えば小寺の文体に与えた作家の影響、「逝く者」で見られた「死」と「生」への眼差し、それが小寺の初期作品から晩年の作品においてどう表れているのか、また同時代の作家と比較してどのような類似点や相違点があるかなど、幾つも見出される。五百点も優に超える彼女の執筆記事や作品と、本格的な小説家を目指した彼女の再評価を、今後も続けていきたい^{二一}。

注

- 一 小寺菊子に関する先行研究としては、塩田良平「小寺菊子」『明日香路』一九五七年、一一三、塩田良平「小寺菊子」『明治女流作家論』（寧楽書房、一九六五年）、田中清一「小寺菊子」『郷土と文学』（伴印刷所、一九六三年）、島尻悦子「評伝小寺（尾島）菊子」『学苑』（309）一九六五年九月、渡辺陽「小寺菊子執筆目録」『静岡国文学』一九七八年二月、八尾正治「大正の閨秀 小寺菊子（1）」（13）『経済月報』二二〇—二三号、一九七九—一九八〇年、杉本邦子「尾島（小寺）菊子解説」『日本児童文学大系6』（ほるぷ出版、一九七八年）、佐藤通雅「尾島菊子（1）」（3）『日本児童文学の成立・序説』（大和書房、一九八五年）、小松聡子「尾島菊子の少女小説の文体」『国際児童文学館紀要（12）』一九九七年三月、小林裕子「職業作家」という選択―尾島菊子論―『明治期女性文学論』（翰林書房、二〇〇七年）、山根春菜「尾島菊子の（少女小説）『綾子』にみる少女の『家出』」『安田女子大学大学院文学研究科紀要・合冊19』二〇一三年、下岡友加「尾島菊子『蚊ばしら』翻刻・紹介」『台湾愛国婦人』掲載小説『広島大学大学院文学研究科論集（77）』二〇一七年二月、拙論「小寺菊子の作品に垣間見る宗教観―『他力信心の女』『念仏の家』より」『群峰4』二〇一八年三月など近年その論稿も増えてきた。例外もあるものの、全体的に、少女小説家としての小寺菊子という前提が見られる。金子幸代による論

文は、「富山の女性文学の先駆者・小寺（尾島） 菊子研究（1）」作品執筆年譜を中心に「『富山大学人文学部紀要51』二〇〇九年をはじめとして、本稿で後に触れるものの他、「富山の女性文学の先駆者・小寺（尾島） 菊子研究（3）メディアとの攻防・『ふるさと』観の変遷」『富山大学人文学部紀要（53）』二〇一〇年、「富山の女性文学の先駆者・小寺（尾島） 菊子研究（4） 徳田秋声・三島霜川・近松秋江と『あらくれ』のこと」『富山大学人文学部紀要（55）』二〇一一年、「小寺（尾島） 菊子の少女雑誌戦略…家出少女小説『綾子』の『冒険』」『富山文学の会ふろさと文学を語るシンポジウム2』二〇一一年三月がある。

二 金子幸代「富山の女性文学の先駆者・小寺（尾島） 菊子研究―作品執筆年譜を中心に」金子幸代編『小寺菊子作品集2』（桂書房、二〇一四）、五〇八頁。

三 小寺菊子「逝く者」金子、『小寺菊子作品集2』、六二―一〇〇頁。
以下引用箇所は本文中に頁数のみ記す。

四 「私の好きな私の作」ここでは金子、『小寺菊子作品集2』、一一四頁の再録を使用した。

五 福田真人『結核の文化史』（名古屋大学出版会、一九九五、二八頁。

六 同上、二頁。

七 同上、二―三頁。

八 同上、一〇〇―一〇一頁。

九 小寺菊子「死の幻影」金子幸代編『小寺菊子作品集3』（桂書房、二〇一四）、一二二頁。以下引用箇所は本文中に頁数のみ記す。

一〇 小寺、「死の幻影」、一一四―一二九頁。

一一 小寺菊子「死の魅惑に」金子、『小寺菊子作品集3』、一九八―一九九頁。以下引用箇所は本文中に頁数のみ記す。

一二 金子幸代「小寺（尾島） 菊子と『女子文壇』・『青鞥』―埋もれた女性職業作家の復権に向けて」金子、『小寺菊子作品集2』、五三四―五四〇頁。

一三 作品数は金子幸代のまとめによる。金子、「富山の女性文学の先駆者」、三四三頁。